参考資料３

東日本大震災被災地支援に派遣した職員が感じたこと

避難所の状況

- 地元の方々はとても我慢強く、不自由の多い生活でもお互いに支え合い、職員・避難者がともに意見を出し合って避難所での生活を運営している様子が印象に残っている。
- 避難所では、集落ごとに町会長の方などがリーダーとなり取りまとめ、行政に対する要望を伝え、行政からの情報の窓口となるなど連絡役を担っていただき、行政側も助かった。
- 避難所には自治があり、各食事は調理担当が輪番制で作っている。他にも清掃担当などが決まっている。
- 避難所の運営を避難者自身で協力してされており、我々スタッフ側に何かしてほしいというようなことはほとんどなく、食事の準備や清掃など毎日のことは班を決めて自主的にされていた。むしろ、我々スタッフが前に出るのは、何かトラブルが起きたり、避難所のルールを決めたりするとき（班長会議を開く）といった限られた場面だけだった。
- 市民センターの２階と３階が避難所となっており、３階は自宅が全壊の方、２階はそこまで被害が大きくない方と居住区域がわかれており、それぞれの階に取りまとめ役のリーダーがいて、何か要望がある際にはリーダーを通じて役所に伝えらていた。

避難所での課題

- 大規模な避難所では、高齢者の何人かに認知症様の症状が出現し、プライバシーのない環境での生活が限界にきているように感じた。

物資の偏り

- 物資には偏りがあった、例えば 400 個のパンが届いても、そのうち 300 個はチョコパンといった状況。
- せっかく物資が届いても、本当に被災者の方が必要としている物が届いていない現状があったので、必要なものが個別に届くような大阪市独自のシステムがあればいい。

仮設住宅での不安が

- 仮設住宅への入居の申し込みが始まったが、単身高齢者の方が、避難所では一緒に生活されていた近隣住民の方と離れて生活することになるので非常に不安だと話していた。
- 仮設住宅に入居されている高齢者や障害のある方が孤立しないような支援が必要。

地域のまとまりとつながりの強さ

- 地域のつながりの強さと、まとまりの良さをとても感じた。
- 高齢者の方々が多く、自分の気持ちを伝えることが困難な中、避難者の方々は集落ごとに集まることで安心感を持たれていた。

日頃の訓練が大切

・ 釜石市鵜住地区では、常日頃の防災訓練のおかげで現場にいた生徒・児童 600 名全員が助かったとのこと、日頃からの訓練の大切さを改めて感じた。

生活保護業務への体制づくに職場の協力を

・ 仮設住宅の入居が進むにつれて、具体的な生活相談が本格化し、生活保護相談も急増することが予想されるので、各職場で協力体制を整え、要請に応じる準備が必要と思った。

普段の活動から

・ 被災地活動といっても特別なことではなく、普段の保健師活動が基本となっていた。

職員も同じ被災者、職員へのケアも

・ 被災されている職員も多くおられたが、業務中は一切そのことを口にせず黙々と業務を行っている、そのような過酷な状況の中で、職員のストレスも相当なものとなっており、職員に対するケアも必要だと感じた。

被災地支援を振り返り、課題と感じたこと

・ 現在、非常災害時の本部編成がなされているが、災害発生時に編成どおりの人員で行動ができるとは限らず、限られた職員の臨機応変な対応が求められる。実際に必要な対応を行動別に簡潔な様式（防水カード式等）に作成し、全職員が保管場所を確認しておくような準備が必要。
・ 直下型震災・津波・火災等異なる条件の想定のもとに、それぞれ具体的な行動計画を示す必要を感じた。
・ 保健の部門では、医療の供給体制について、区医師会・病院等との早急な協議が必要。
・ 長期対応の支援を考えるにあたり、職員と外部からの支援をどのように組み合わせ、限られたマンパワーをどこに使うのかが重要なポイントになる。それらの判断の基礎となる情報収集の仕組み、記録の重要性について学んだ。
・ 平常時からの備えが重要であることを改めて感じたことで、机上の計画だけでなく、どのような準備ができているのか、何が足りないのか、いざという時どう動くのかなど、所属の全職員で話し合い、共有しておく必要がある。